高齢者居住施設居室の「もの環境」とその印象

第三者による印象評価の可能性について

ASSESSING THE QUALITY OF RESIDENTIAL FACILITIES FOR THE ELDERLY

Impressionistic assessment trials of a nursing home by third party viewers

古賀 紀江*, 横山 ゆりか**, 李 京 洛***

Toshie KOGA, Yurika YOKOYAMA and Kyeong-Lark LEE

Along with continued graying of society, we have seen growing interest in residential facilities for the elderly and how these facilities can be upgraded and improved from a design standpoint. The purpose of this study is to gain insight into how the quality of life can be supported by enhancing and improving the physical design of the rooms in which they reside. Because many elderly tenants are vulnerable and frail, they predictably find it hard to evaluate their own living environments.

This led us to consider the possibility of assessing the quality of residential environments in a way that does not rely on subjective feedback of residents themselves. This can be done by determining whether a room satisfies a certain comfort level for the occupant based on the appearance of the room. We conducted impressionistic assessment trials by objective third-party observers of rooms actually occupied in residential facilities by elderly tenants. Next, we inventoried the number and variety of the furnishings and objects in rooms that serve as an index of a comfortable everyday life of the residents, and compared these findings with the results of the impressionistic assessment trials.

The results suggest that it is indeed possible to predict to a degree what furnishing and objects have the greatest effect in creating a well-designed environment and should be incorporated in rooms to house the elderly.

Keywords : Residential Facilities, Nursing home, Private Room, Impressionistic Assessments Trials, QOL

「もの」環境, 高齢者居住施設, 居室, 印象評価実験, 生活の質

1. 研究の背景と目的

高齢者居住施設は、平成 14 年に個室ユニットケアが制度化されるなど、居室の個室化が進められてきた。平成 20 年度には全国 6015 の介護老人福祉施設のうち、1630 の施設がユニットケアタイプで個室居住が確保されている。本研究では、施設に入居する虚弱高齢者が入居後のQOLを維持向上できるようにするために、入居者の居室内部での行動の幅が広がるような環境整備面を目指して、個室型居室の居住環境の質について分析を行う。個室をそれぞれが持つようになると、個々に合わせたインテリアを整えることがより容易になる。Wilson & Mackenzie(2000)¹⁾によると、人はインテリアから住む人の社会性を読み取り、それには一定の合意が見られる。高齢者居住施設においても、インテリア、即ち個室の「もの」の選択と配置はその人の社会性を示す重要な要素となるだろう。

一方で、高齢者居住施設の居室環境の物理的要件については、これまで多くの議論がなされ、多くの改善が加えられてきた。ある環境で高い生活の質を実現するためには、改善された環境へ入居した虚弱高齢者にとっての居住環境の質を考える必要がある。

その中で、高齢者居住施設入居に最大の問題である「移動によるストレス」を軽減するのに、自宅で行っていた日常的な活動ができるような「もの」の環境を用意することは有効であろうという議論がされてきた（たとえば Toyama(1986)²⁾, 大原(1988)³⁾）。この議

論を踏まえて「もの」の環境と身体的条件の関係を調べるために Koga, Yokoyama et. al(2002)⁴⁾ は、施設居住者の居室内の所有物を、Csikszentmihalyi 等(1981)⁵⁾ の言う日常の生活で用いる「行為対象」と、見るための「観賞対象」の概念を援用して分析している³⁾。生活に関連する行為対象が中心となっていた調査施設の「もの」の環境とADL程度との相関は、虚弱な人ほど行為対象とするものが少なく、居室での活動の幅が狭まっていることを示唆していた。この結果からも「もの」は入居者の日常生活を映し出すものとして有効な指標となり得ると考える。

本研究では居室を訪れた人が目にする、居室内に表出している物品や家具によって形成される状況を「もの環境」と呼ぶ。本研究は、第三者による部屋の印象評価と「もの」環境との関連の分析を通して「もの環境」を媒介とした居室環境の評価が可能であるか、考察を試みるものである。

2. 研究の方法

本研究は高齢者居住施設の居室内の「もの」環境調査と居室の印象評価実験の2つの部分から成る。

2-1 「もの環境」の調査方法

高齢者居住施設Aの入居者18名の協力を得て室内全面を写真撮影し、表出している物品の状況を捉えた。具体的には、撮影した写

* 前橋工科大学工学部建築学科 准教授・博士(工学)

** 東京大学大学院総合文化研究科 准教授・博士(工学)

*** 韓国 永同大学工学部建築学科 副教授・博士(工学)

Assoc. Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Maebashi Institute of Technology, Ph. D. in Eng.

Assoc. Prof., Graduate School of Arts and Sciences, University of Tokyo, Ph. D. in Eng.

Assoc. Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Yong Dong University, Ph. D. in Eng.

表 1 印象評価実験に用いた居室写真の一覧表

1	2	3

4	5	6

7	8	9

10	11	12

13	14	15
提示写真のデータ 平均居住年数:32.0ヶ月 平均ADL:13.9 平均認知症程度:2.07 表出しているものの平均個数:83.75個 表出行為対象平均個数:58.13個 表出観賞対象平均個数:25.63個	
16		

真全てを用いて、1室ごとに写り込んでいる「もの」の内容と数を把握し、これを「もの環境」として整理した。以上により捉えた「もの環境」を前述の「行為対象」と「観賞対象」に分類して分析する。

2-2 印象評価実験の方法

居室環境の印象評価は、入居者本人に尋ねる方法もあり得るが、対象者が虚弱であったり認知症であったりする場合は、直接尋ねることがしにくい。そのため、今回は、一般学生に居室の光景を見せて評価させる方法をとることにした。なお、施設環境の光景の印象評価については、食事場面について、動画および静止画を見せて評価を比較したところ、両者の評価が同様の傾向を見ることが確認されている^{6)・7)}。したがって、ここでは、静止画すなわち居室内写真を見せる手法をとった。

撮影した写真のうち、その居室の特徴を最も良く表した1枚を選択し、評価実験のサンプルとした。ただし、入居者の都合から適切なアングルの写真撮影ができなかったケースを省く作業を行った。まず、1) 著者3名のうち、2名以上がその部屋の雰囲気をもっとよく表しているとして選択した18室18枚から、2) 本来の「もの環境」に対して写真に写っている「もの」の数が極端に少ない、あるいは極端に多い2室を除外した^{注1)}。

選択した16枚の写真をもとに1枚のシートに並べた居室写真の一覧表

表 2 印象評価実験・評価軸一覧

論文中用語	評価内容(5段階)
楽しさ	楽しい印象—つまらない印象
なじみ深さ	馴染み深い感じ—馴染みがない感じ
ゆったりさ	ゆったりした印象—窮屈な印象
清潔感	清潔な印象—不潔な印象
整理整頓	整理されている感じ—乱雑な感じ
明るさ感	明るい感じ—暗い感じ
伝統性	伝統的な印象—現代的な印象
広さ感	広い印象—狭い印象
落ち着いた印象	落ち着いた感じ—落ち着かない感じ
賑やかさ	賑やかな印象—さびしい印象

表 3 居住者プロフィールと「もの環境」概要

平均年齢	86.6歳
ADL程度 ^{(注2)(文8)}	13.4
認知症程度 ^(文9)	2.2
居住期間	40.2ヵ月
居室に表出していた「もの」の総数	86.1個
・表出していた行為対象の数	59.9個
・表出していた観賞対象の数	26.1個

表 4 多くの人の居室で表出していた「もの」の種類

表出していた行為対象			表出していた観賞対象		
項目	所有者数	総数	項目	所有者数	総数
タンス	18	20	写真	16	88
床頭台	18	18	時計	15	19
ベッド	18	18	置物など	15	88
TV	18	18	カレンダー	14	24
タオル	16	56	花瓶	14	19
ティッシュ	16	26	のれん	14	14
ゴミ箱	15	22	壁飾り、絵	13	43
カップ	14	27	壁に掛ける飾り、絵	13	43
歯ブラシ	14	21	ぬいぐるみ	12	38
布巾	13	17	手紙	6	11
洗面器	12	17	飾り用敷物	5	6
椅子	12	17	パンフレット	4	8
モップ	11	11	書籍	4	43
スポンジたわし	11	11	色紙	4	4
フトン	10	10	賞状	3	5
プラスチック製小棚	10	11	数珠	3	2
車椅子	9	9	アルバム	2	2
介護・医療用品	9	26	アクセサリ	2	2

※全ての居室に表出していたものの合計:1547個

※全ての居室に表出していたものの種類:273種類

※行為対象は入居者の半数以上(9人)が所有していたもの、観賞対象は2名以上が所有していたものを表中に記した。

を作成し、被験者に提示した(表1)。評価実験では、被験者(学生92名)に、写真1枚ごとに表1に示す評価軸(表2)に基づいて、5段階評価をしてもらった。実験は、2010年10月～2011年1月にかけて実施した。

3. 「もの環境」の調査概要

3-1 調査対象施設

本研究調査の対象として協力を得た施設は岐阜県内のA施設である。1973年に開設後、2002年に全室個室の建物が新築され現在に至る。対象施設は、5つのユニットから構成された定員120名の施設である。各居室の面積はおおよそ13m²、押入れを備えている。

3-2 入居者属性と「もの」の所有状況の概要

今回調査協力者の特徴を以下に示す。居住月数は平均40.2ヵ月、ADL程度^(注2)・8)平均は13.4点(18点満点)、認知症程度⁹⁾は2.2点(最も進んでいて6点)であった(表3)。全18室の写真中には、およそ273種類の物品が総計1547個確認された。表出している「もの」が最も多い人の居室には、89種類199個、最も少ない2名の表出物品数は41個でそれぞれ38種類と36種類のものの表出が認められた。各居室内で撮影されたものの個数の平均は、行為対象が59.9個、観賞対象が26.1個、居室内に表出していたものの総数は86.1個である(表3)。多くの居室で見られた「もの」を表4に示した。

尚、調査協力者は、男性2名、女性16名である。上記各項目における男女間の平均値に有意差は認められなかった。分析は男女合

せて行った。

入居者のADL、認知症程度、居住期間といった個人属性が「もの環境」に影響を及ぼしているのかどうかを予測するために、両者の相関状況を見ることにした(表5)。個人属性間の相関では、認知症程度と居住期間の間に弱い相関傾向($p<0.1$)が認められた他は、ADL程度、認知症程度、居住期間相互の相関は認められなかった。さらに、これら個人属性の項目と各所有物の数の間にも相関は認められなかった。

調査対象とした施設では、ADLや認知症の程度に「もの環境」が左右されることはなく、また、居住期間の長短が同様に「もの環境」に明らかな影響を与えていないと考えられる。

3-3 所有状況から見た施設の特徴

次に、入居者のADLを高低2群に分け^{注2)、8)}、分析を行った。

表出している行為対象数の平均は共におよそ60個、観賞対象では高ADL群が27.4個、低ADL群が23.7個、総計での平均は、86.8個、84.9個である。両群の平均個数の差に有意差は認められない(t検定)。つまり、「もの環境」の量的側面はADLの高低では大きな違いは認められなかった。(表6)

高ADL群では表出しているものの個数とADL程度の間に有意傾向のある相関が認められたが、低ADL群では認められなかった。身体機能が低い群では、身体機能の程度に「もの環境」が呼応せず、同時にADLが高い人と変わらない「もの環境」にあることが分かる。以上は、調査対象施設では自立度が低い場合にも、居室のものを環境を整える行為が居住者以外の他者によって比較的積極的に行われていることを示している。一方、高ADL群で表出している物品内容とADL程度の間で認められた相関は、自立度の高い人が、自らの生活内容に合わせた物品を用意しているためと思われる。(表7)

この施設では入居者のもの環境が、なるべく自宅に近い形で整えられるようにという配慮から各室に「押入れ」が計画されており、また、家族に入居者が日頃から用いていたもの、親しんでいたものを持参するよう奨励している。こうした環境も、居住者自身の身体機能の程度によらないもの環境の実現に影響を与えている要因の一つと考えられる。

試みに完全個室型のB施設で行った調査結果¹⁰⁾を同様に高低ADL群に分けて「もの環境」の分析を行った結果と比較する。(尚、B施設の概要については参考文献4)を参照のこと。)高ADL群と低ADL群ではものの所有内容に格段の差があり、低ADL群の所有総数は高ADL群の半数に満たない(表8)。しかも、低ADL群では、身体機能程度とものの個数の間に極めて強い相関が認められ、身体機能が低ければ居室はそれだけ「もの」の少ない状態であることがうかがえた(表9)。本調査の結果とは大きな差異となっており、「もの」環境の整備に力を入れていることが今回の調査対象施設の特徴と言える。

ところで、上記の調査の、自立度の高い高ADL群の入居者の所有物数の平均は90.3個であり、今回調査の86.8個に近い。古賀、横山(2009)¹⁰⁾における高ADL群と今回の高ADL群の居室における「もの環境」の近似は、高齢者居住施設のある程度活動的な居住者の居室に表出されている「ものの量」がおおよそ90個内外程度であることを示唆している。この数をもって「部屋らしい環境に必要なものの数の目標」と決定されるものではないが、その人に必

表5 ADL、認知症程度、居住期間と「もの環境」の相関

	ADL程度	認知症程度	居住期間
ADL程度	1		
認知症程度	-0.293	1	
居住期間	-0.390	0.458	1
「もの環境」:居室に表出しているものの数	行為対象	0.147	-0.162
	観賞対象	0.296	-0.178
	総数	0.224	-0.183

表6 ADL群別に見る「もの環境」

ADL群	項目	A施設		
		表出している行為対象の数	表出している観賞対象の数	表出している「もの」の数合計
高ADL群	度数	11	11	11
	平均値	59.5	27.4	86.8
	中央値	62.0	25.0	80.0
	標準偏差	29.0	20.8	46.1
低ADL群	度数	7	7	7
	平均値	61.1	23.7	84.9
	中央値	70.0	18.0	88.0
	標準偏差	20.1	11.2	30.2

表7 ADL群別 「もの環境」とADL程度の相関

群	項目	A施設			
		度数	相関係数		
高ADL群	行為対象	11	0.59	凡例	
	観賞対象		0.53		
	表出物数		0.61		
低ADL群	行為対象	7	-0.15		:有意な相関あり。P<0.05
	観賞対象		0.09		
	表出物数		-0.07		:有意傾向あり。0.05<p<0.1

表8 ADL群別に見る「もの環境」B施設

ADL群	項目	B施設		
		表出している行為対象の数	表出している観賞対象の数	表出している「もの」の数合計
高ADL群	度数	8	8	8
	平均値	68.9	21.1	90.3
	中央値	67.5	13.0	79.5
	標準偏差	28.8	20.4	37.7
低ADL群	度数	5	5	5
	平均値	28.2	10.2	38.4
	中央値	19	8	27
	標準偏差	26.1	10.9	36.6

表9 ADL群別 「もの環境」とADL程度の相関 B施設

群	項目	B施設			
		度数	相関係数		
高ADL群	行為対象	8	0.37	凡例	
	観賞対象		0.01		
	表出物数		0.29		
低ADL群	行為対象	5	0.98		:有意な相関あり。P<0.05
	観賞対象		0.93		
	表出物数		0.98		:有意傾向あり。0.05<p<0.1

要な内容を揃えていく時の一つの目安とすることはできないだろうか。また、今回調査の低ADL群の室の「もの環境」は、本人が整えられる能力以上に「良く整えられた」スタッフ等の努力の結果と捉えることができるのではないかな。

4. 居室の印象評価

2章で述べた方法で選択し、表1に示した16の居室の写真を提示して行った印象評価実験の結果を以下に詳述する。

4-1 印象評価の概要

①印象評価得点傾向

各評価項目は1点から5点で評価するように設計した。平均点が低いのは順に、楽しさ(2.52)、なじみ深さ(2.72)、伝統性(2.78)、

賑やかさ(2.78)であった。高得点は、清潔感(3.35)、整理整頓(3.22)、明るさ(3.18)であるが、全体に評価は低い。標準偏差から馴染み深さ、伝統性は評価がまとまる傾向があり、ゆったりさ、広さは標準偏差が大きく評価のされ方に幅がある傾向が見られる。(表10)

②印象評価得点と居住者特性の関係

評価対象とした写真の印象評価得点の平均点と評価写真の室の居住者のADL、認知症程度及び居住期間の間には、「落ち着き」と認知症程度にのみ相関が認められた($r=0.64, p<0.05$)。認知症の進んだ人の部屋ほど「落ち着いた印象」が強いという結果である。

③評価実験に用いた写真中のものの数と評価傾向の関係

写真に写っているものの内容(種類と数)と評価得点の間には「楽しさ」、「なじみ深さ」「賑やかさ」の3項目で観賞対象の数と総数の間に相関及び相関傾向が認められた。特になじみ深さは、評価者の目に入る「もの」の数が多いほどその印象を強めていたと言える。(表11)

4-2 ADL程度が印象評価に与える影響

各居室居住者のADLを高低2群^{注2)、8)}に分けて、第三者による印象評価得点傾向の分析を行った。

① グループ別評価項目ごとの平均点の差

高低のADLグループの間の評価項目の得点平均に有意差は認められなかった(t検定)。(表12)

② ADL程度のグループ別印象評価と評価写真中の「もの環境」の関係

写真に写り込んでいる行為対象、観賞対象の数と評価得点の相関の有無について、①と同様ADL程度別の2群に分けて結果を確認した(表13)。低ADL群で、行為対象や観賞対象の数と「楽しさ」「なじみ深さ」「賑やかさ」の間に強い相関、相関傾向が認められた。有意性は認められないが、低ADL群では「もの環境」の量的豊かさが明るさと高い相関を示し、逆に伝統性とは弱い負の相関関係を示した。以上から、低ADL群の「もの環境」は、スタッフや家族などによって、伝統的な雰囲気ではなく、楽しい雰囲気を目指して整えられたと見られる。

対して高ADL群では観賞対象の数が多いほど、「伝統性」の評価が高い結果を得た。しかし、他の評価項目では、「もの」の量と評価得点の間に相関は認められなかった。居室内の「もの環境」に関して数の上では大きな差が認められない調査対象施設であるが、生活場面に自発性が強い場合、ものが多くそえられることは必ずしも第三者に高い評価を受けるわけではないことが分かる。

5. もの環境と印象評価

5-1 印象評価項目間の関係

印象評価における項目間相互の相関関係を、評価10項目で相関が認められた($r=0.4$ 以上)項目を結んだ図で示した(図1)。相関の正負は線種で、有意性の程度は線分の太さで区別している(図1凡例を参照)。図中の数値は相関係数を示す。

「楽しさ」「なじみ深さ」「賑やかさ」の間には非常に強い相関が認められ、一つのグループを形成する。別に「落ち着き」「広さ感」「整理された印象」「清潔感」「ゆったりさ」が一团を作り、項目の間に前者と同様に強い相関関係が認められた。「明るさ感」は、二つのグループに対して正の関係を示した。「伝統性」は後者グループに

表10 印象評価平均点(N=92)

	平均値	標準偏差
楽しさ	2.52	0.56
なじみ深さ	2.72	0.35
ゆったりさ	3.07	0.92
清潔さ	3.35	0.79
整理整頓	3.22	0.86
明るさ	3.18	0.67
伝統性	2.78	0.36
広さ	3.08	0.91
落ち着き	2.97	0.48
賑やかさ	2.78	0.69

表11 「もの環境」と相関が認められた印象評価項目

印象評価項目	実験用写真に写っている「もの」環境の内容		
	行為対象の数	観賞対象の数	表出している「もの」の総数
楽しさ	0.21	0.52	0.58
なじみ深さ	0.31	0.66	0.70
賑やかさ	0.16	0.49	0.57
: 有意な相関が認められたもの。p<0.05			
: 相関に有意傾向が認められたもの。0.05<p<0.1			

表12 高低ADL群別印象評価平均点一覧

評価項目	高ADL群	低ADL群	評価項目	高ADL群	低ADL群
楽しさ	2.48	2.60	明るさ感	3.19	3.17
なじみ深さ	2.72	2.72	伝統性	2.80	2.73
ゆったりさ	2.98	3.26	広さ感	2.99	3.27
清潔感	3.32	3.42	落ち着き	2.89	3.15
整理整頓	3.24	3.19	賑やかさ	2.74	2.89

表13 高低ADL群別印象評価平均点と「もの環境」の相関

もの環境 評価項目	高ADL群			低ADL群		
	行為対象の数	観賞対象の数	表出しているものの総数	行為対象の数	観賞対象の数	表出しているものの総数
楽しさ	0.05	0.14	0.13	0.82	0.98	0.93
なじみぶかさ	0.34	0.52	0.54	0.89	0.93	0.94
ゆったりさ	-0.16	0.10	-0.03	0.39	0.36	0.39
清潔さ	-0.28	-0.15	-0.26	-0.23	-0.10	-0.18
整理整頓	-0.32	-0.11	-0.26	-0.21	-0.19	-0.21
明るさ	-0.29	0.04	-0.14	0.79	0.66	0.76
伝統性	0.43	0.69	0.71	-0.50	-0.64	-0.59
広さ	-0.11	0.11	0.01	0.52	0.42	0.49
落ち着き	-0.18	0.20	0.03	0.35	0.12	0.25
賑やかさ	0.05	0.11	0.11	0.88	0.98	0.97
: 有意な相関が認められたもの。p<0.05						
: 相関に有意傾向が認められたもの。0.05<p<0.1

図1 評価項目間の相関関係

図2 評価項目間の主因子分析の結果 プロット図

図3 印象評価と表出している行為対象、観賞対象の物品数との関係

対して負の相関関係を示す。

「楽しさ」「なじみ深さ」「賑やかさ」は場所の印象のうち、親近感に関係するグループ、「落ち着き」「広さ」「整理された印象」「清潔感」「ゆったりさ」のグループは、場所の維持管理の状態に関するグループと見ることができる。(図1)

評価項目の主因子分析を行ったところ、3つの群を認めることができた(図2)。「楽しさ」「なじみ深さ」「賑やかさ」の親近感に関するグループ、「落ち着き」「広さ」等からなる場所の維持管理状態に関するグループと「伝統性」の3群で、これらは印象評価項目間の相関から捉えられた3群と一致する。

5-2 評価項目グループと「もの環境」の関係

各居室に表出していた行為対象、鑑賞対象の数と印象評価得点の相関関係を図3に表した。図1と同様に相関が認められた($r=0.4$ 以上)項目同士を結んだ。相関の正負は線種で、有意性の程度は線分の太さで区別し、線には相関係数を記している(図3凡例参照)。

「清潔感」「ゆったりさ」「整理された印象」「広さ感」と行為対象の数の間に負の相関が認められ、特に「清潔感」との間に強い負の相関が見られた。また、「落ち着いた感じ」「明るさ感」との間には負の相関の傾向が認められた。有意な結果ではなかったが、「なじみ深さ」と行為対象の数の間には正の相関が示唆された($r=0.52$, $p=0.103$)。

観賞対象の数は、「なじみ深さ」「伝統性」との間に正の相関が認められた。一方で「清潔感」との間には、負の相関傾向が認められた。

「もの」のうち、行為対象が多いと、「清潔感」や「整理された印象」「広さ感」といった維持管理に関する印象評価を下げる傾向が見られ、一方で「なじみ深さ」という親近感に関する評価項目得点を高める可能性が見られた。また、特に観賞対象として持ち込まれるものは「伝統性」の印象を与えることに寄与していた。また、親近感に関する評価項目のうち、なじみ深さも増す傾向が見られた。

行為対象として持ち込まれたものには伝統的なものはあまり見られず、観賞対象として持ち込まれたものに伝統的なものが多く含まれていることがうかがわれる。また、清潔感については行為対象、観賞対象に関わらず、居室内に表出している物品が多くなると評価が低くなる傾向が見られた。

6. まとめと考察

本研究の結果から、以下の点が明らかになった。

(1) 調査対象施設ではADLや認知症程度、居住期間が居室の「もの環境」に明らかな影響を与えていなかった。ADL程度を高低2群に分けて、「もの環境」を比較した結果からは、高ADL群では有意傾向のある相関が認められたが、低ADL群では認められなかった。つまり、対象施設では高ADLの自立度の高い人が自らの生活に合わせて「もの環境」を整えていること、低ADLの人の「もの環境」の整備にはスタッフや家族などが関わっているため、本人のADLの影響が少ないことが推察された。

(2) A, B2施設の入居者を高低ADL群に分けた「もの環境の分析」の結果は、高齢者居住施設のある程度活動的な居住者の居室に表出されている「ものの量」がおおよそ90個内外程度であることを示唆していた。入居時に必要な物品を揃えていく時の一つの目安とすることができるのではないかと考える。

(3) 低ADL群では「楽しさ」「なじみ深さ」「賑やかさ」の間に相関が認められ、高ADL群では伝統性と観賞対象、表出しているものの総数の間に強い相関が認められた。低ADL群の人の部屋を整える際には「楽しく」「なじみ深く」「賑やかな」印象を心がけていることがうかがわれ、自立した高ADLの人の居室には、「伝統的」と映るものが比較的に見られる。

(4) 生活面で必要な物品を自分で用意できる人の居室では、「もの」が多く揃えられたことが、必ずしも第三者に好印象をもたらすものではなかった。

(5) 場所の印象評価は主として、清潔感、整理された印象など維持管理状態に対する評価で構成される部分と、なじみ深さや楽しさ、賑やかさなど親近感に関する評価で成り立つ部分から成立し、その他として伝統性があげられる。

(6) 「もの環境」と印象評価には一定の関係がある。まず、行為対象は維持管理状態に関する印象と密接に関係する。一方でなじみ深さとも関係する。観賞対象は親近感に関わる印象の内、特になじみ深さの印象に関わることが示唆された。即ち、日用品、衣類などの行為対象の多い部屋は、清潔感、整理された印象などで低評価になりやすく、一方でなじみ深さを増す傾向にある。観賞対象はなじみ深さと共に伝統的な印象にも関わる。観賞対象として持ちこまれているものは主に日頃なじみ深い感じのものと、伝統的な印象を感じさせるものであることがうかがえる。

(7) 少なくとも低ADL群の居室では行為対象が多いと維持管理に関する評価は低くなる一方で、「楽しさ」「なじみ深さ」「賑やかさ」といった親近感に関する印象評価が高くなる傾向が見られた。行為対象が多いことは必ずしもマイナスばかりではない。物品の種類によっては印象にプラスの効果を及ぼしうる可能性もあることを付記しておきたい。

謝辞

本研究にあたり、協力をいただいた高齢者居住施設の方々に心より御礼申し上げます。

付記

本論文は、平成22年度科学研究補助金基盤研究(C)課題番号22560619「高齢期におけるリロケーション後の環境行動支援」の研究成果の一部である。

注

- 注1) 除外の判定は、写真ごとに写真の中の空白面積を算出した空白率と、居室に表出している全物品数を基準に行った。居室内に実際に表出している全物品数の多寡による順位と、その室の提示写真の空白率の順位が、9位以上開いているものは写真がその室の物品の状態を正しくあらわしていないものとして除外することにした。ただし9位という数は、調査対象室数の半数を目安に決めた。結果として2事例が除外された。
- 注2) 本研究ではカットのADL程度指標⁸⁾を用い、6つの行為動作項目にする①自立、②半介助、③全介助の3段階で評価を自立3点、半介助2点、全介助を1点として得点化した。全てが半介助の12点を境界として、13点以上を高ADL群、12点以下を低ADL群とし、両群の分析を行った。

参考文献

- 1) Margaret A. Wilson, Nicola E. Mackenzie: 2000 Social Attributions Based on Domestic Interiors, *Journal of Environment Psychology* 20, pp.343-354, 2000
- 2) Toyama, Tadashi: Identity and milieu, The Royal Institute of Technology Stockholm SWEDEN, 1988
- 3) 大原一興: 高齢者居住施設におけるパーソナライゼーション, 日本建築学会編, 人間-環境系のデザイン, pp.128-145, 1997
- 4) Koga, Toshie, Yurika Yokoyama, Tadashi Toyama, Takashi Takahashi & Hiroshi Tachibana: Environment Quality of Private Rooms and Resident's Assessment of Nursing Homes, The Proceedings of the 5th. International Symposium for Environment-Behavior Studies, pp.621-631, 2002
- 5) Csikszentmihalyi, Mihaly & Rochberg-Halton, Eugene: Meaning of the Things, Cambridge Univ. Press, 1981
- 6) KOGA, Toshie, Yurika Yokoyama, Kyeong-Lark Lee & Hyun-Hee Lee: Impression Comparison of Dining Room at Elderly Residential Facilities in Korea and Japan, Proceedings of the 20th IAPS Conference, 2008 (e-abstract), 2008
- 7) 古賀紀江, 横山ゆりか: 環境評価実験の体験学習- 日韓の高齢者居住施設における食事場所を題材として, 第9回建築教育シンポジウム建築教育研究論文報告集, pp.53-58, 2009
- 8) Katz, Sidney et al.: Studies of Illness in the Aged. The Index of ADL: A Standardized Measure of Biological and psychological function, *JAMA*, pp.914-919, 1963
- 9) Berger EY: A System for Rating the Severity of Senility *Journal of the American Geriatrics Society*, vol.38, pp.234-236, 1980
- 10) 古賀紀江, 横山ゆりか: 高齢者居住施設入居者の「もの」環境の経年変化に関する研究 ADLと認知症程度と「もの」の量, 日本建築学会大会学術講演梗概集(東北), pp.159-160, 2009

(2011年10月10日原稿受理, 2012年4月18日採用決定)